「九冊の日記帳」

松田　紗詠子

今、私の手元には、七冊の日記帳ノートが残されています。三日坊主の私にしては珍しく、ほぼ二年間にわたって毎日、小学五・六年の学校生活について綴ったもので、そのどこか一ページを開くと、今でもその時の学校の様子がはっきりと思い出されます。

日記を書き始めたきっかけは、五年生から担任になった先生が、病気で六月の運動会前に突然入院してしまったことでした。退院した時に先生に読んでもらいたいなと思い、クラスの出来事を中心に六月末の十一歳の誕生日から書き始めました。席がえしたこと、五月から作っていた図工の壁掛け作品が完成したこと、先生と行くはずだった宿泊研修のこと、写生会で賞をとったこと、習字のこと、家族旅行のことなど、いつも寝る前に、「先生どうしているかな？」とちょっとだけ考えてから、一気に書きました。修学旅行の後は三日分まとめて書きました。姉妹以外には秘密だったバレンタインデーのチョコをあげた男の子の名前もノートに書いてしまいました。

先生はなかなか退院できず、気がつくと日記帳は二年間で九冊になっていました。母はかなり迷った末に、小学校の卒業式の日、教室で撮ったクラス写真と一緒に日記帳を先生に送りました。

私が中学生になってから、日記帳七冊と手紙が先生から送り返されてきました。手紙には、「紗詠とのつながりを感じるこの日記帳を思い出にしたいので、二冊だけは手元に残しておきます。」と書いてありました。他にも「海にも山にも行きたい。」「列車に乗って旅をしたい。」「紗詠がうらやましいな。」と書いてありました。日記帳には、先生のコメントや、かわいい絵が描いてあり、最後に「ありがとう」とありました。

それからしばらくしたある日、母が静かに新聞のおくやみ欄に先生の名前が載っていると言いました。私は新聞を見て声をあげて泣き、しばらく涙がおさえることができませんでした。今よく考えてみると、先生は二ヶ月程担任だっただけで、その時にはまだそんなに親しくもなく、特別な思い出も作ることはできませんでした。先生に対する痛いほどの思いは、すべて、日記帳を毎日綴ることを通してつくられた、私の心の中の絆なのだと思います。先生が実際にどんなことを考えながら読んでくれたのかはわかりませんが、先生が持っている二冊のノートを天国でニコニコしながら読み返してくれていると思います。